

5年と屋敷

※題字／森川芳聲



柳川市西鉄柳川駅西口前

歌碑のこころ

からたちの花

北原白秋作詞

山田耕筈作曲

からたちの花
からたちの花が咲いたよ
白い花が咲いたよ
青い青い針のとげだよ
からたちは畑の垣根よ
いつもいつもとほる道だよ
からたちも秋はみのるよ
まろいまろい金のたまだよ
からたちのそばで泣いたよ
みんなみんなやさしかったよ
からたちの花が咲いたよ
白い花が咲いたよ

北原白秋



からたちの花が咲いたよ
白い花が咲いたよ
からたちのとげはいたいよ
青い青い針のとげだよ

もくじ

- 2 巻頭言 山登り…………… 山口 秀範
- 3 「社中」だより…………… 鷹取 綱一
- 4 「偉人レポート」…………… 武田真理子
- 6 天地いつぱい①…………… 森川 徹
- 7 唱歌「童謡」…………… 森田 仁士
- 8 あれこれ思うこと⑤…………… 古川 忠
- 9 信長、秀吉とバテレンの戦い(最終回)… 廣木 寧
- 10 TERA KOYA ふおとれぼーと
- 11 “あちこちde寺子屋”のご案内
- 12 歌碑のこころ(17) 編集余録 余録の余録

山登り

代表世話役 山口 秀範

宝満山に苦戦

今年の春は、桜の開花を皮切りに例年よりも軒並み早く花咲き満ち、今や山々は新緑の盛りです。一方で疫病蔓延の状況は好転せず、鬱陶しい空気が世情を覆いついています。大都市への出張や行楽シーズンの旅行もままならず、ストレスが蓄積しそうな日常の中でお勧めしたいのは「山登り」です。

かく言う私が山登りに目覚めたのは今から十五年前、友人に誘われて軽い気分でも宝満山を目指したことにあります。古くから大宰府政庁の鬼門除けとして信仰を集めた山で別名「竈門山」^{かまどやま}、最近「鬼滅の刃」で脚光を浴びている竈門神社の上宮が山頂に鎮座する八二九mの霊峰です。福岡では最も人気ある山で、私も子供の頃に楽しく登った記憶と共に出発しました。

ところが日頃の運動不足が祟り、早々に体力消耗してあわや途中で断念しそうになりました。励ましを受けつつ何とか頂上にたどり着いたものの、自ら深く恥じ入る結果に終わりました。

失敗談

それを契機としてバス通勤を徒歩に切り替え、ノールコールデイを毎月十日以上確保するなど心機一転、休日には努めて背振山系の山々に出かけるようになりました。始めて見ると愛好者は多く、誘い合つて出かけます。

九州の主だった山々——雲仙、阿蘇、久住、英彦山、開聞岳など——を踏破すると、大山、剣山といった名山にも挑戦したくなります。四国へフェリーで渡り、剣山の翌日にもう一つ制覇したつもりで横を見ると何とそれが目指す石鎚山（登山口を間違えて隣の山に登っていた）だったという失敗もあります。

日本アルプスの三千m級の高山の空気を吸ってみたいくて、数年前の七月に木曽駒ヶ岳に挑みました。早朝始発のロープウェイで中腹まで上がり、午前中登頂後に頂上付近の山小屋へと到着しました。そのまま一泊では勿体ないと別ルートを探して足を延ばすうちに雨が降り出し、戻る途中ではアイゼンが必要な雪渓で転倒して斜面を転がり、肋骨にひびが入る傷を負ってしまいました。危うく道に迷う寸前まで立ち至り、改めて自然の恐ろしさを経験させられました。

文学上の山登り

山登りは古今の文学にもしばしば登場しています。

山路を登りながら、かう考へた。
智に働けば角が立つ。情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

夏目漱石の『草枕』冒頭の一節は有名です。主人公の絵かきに、歩きながら湧き上がる想念を延々と綴らせながら物語は進行します。もつとも、険しい登山道ではまとまった思考は無理と思われるところから、漱石がたどった道は峠を越えて隣村へとつながる生活道であつたろうと推察できます。

唐代の詩人杜牧に「山行」と題した七言絶句があります。

遠く寒山に上れば石径斜なり
白雲生ずる処人家有り
車を停めて坐に愛す楓林の晩
霜葉は二月の花よりも紅なり

詠み出しは人里離れた秋の山に一人に登っている風情ですが、その先に人家がありしかも徒歩ではなく車で行っていたとは。早春の花・桃よりも赤い楓の林を愛でる詩から、下級役人の杜牧でさえ人夫の押す車で紅葉見物をするという、身分制国家の実態までが見えて来ます。

登山の効用

かつて新入社員研修で、山登りしながら作った短歌を相互批評する時間の担当を引き受けていました。ある年に二人の新卒フレッシュマンが作った歌です。

不安げに道をふみしめかけ登るけわしい道とまだ見ぬ明日を

足元の石ばかり見て登るうちふと眺めればふもととはるか

一首目は、山道を駆け上りながら、険しいであろう明日からの社会人生活を連想しているという歌です。しかし登山のきつさと実生活の厳しさは似て非なるもので、それを安易に結びつけてはムードに流されてしまいます。

それに比べると次の作者は山登りに専念しており、いつの間にか高みに到達した充実感が表現された良い歌でしよう（「ふもととはるか」は字足らずなので「麓は遙か」か「麓遙かに」と一字加える）。私も登山中は出来るだけ集中して安全を心がけます。それでも季節の移り変わり、自然の力強さは心を浄化してくれまし、漱石にはとても及ぶべくありませんが、取り留めなく浮かぶ様々な思いは生きるヒントにもなります。

握り飯弁当を用意して、体力に応じた山歩きへ出かけませんか。

